

日 時： 平成 30 年 2 月 22 日(木) 午後 1 時 30 分～午後 2 時 40 分

場 所： LIC はびきの 教育研究所会議室

出席者：(委員) 岸下委員、上野委員、脇谷委員、南野委員、渡辺委員、小澤委員、山下委員、
菅谷委員、瀬戸口委員

(教育委員会) 高崎教育長、清水教育次長兼生涯学習室長

(事務局) 堀田課長、奥野館長、安東課長補佐、岩佐主幹

欠席者： 齊藤委員

傍聴者： 2 人

●開会

教育長挨拶

(教育長 公務のため退席)

●議事

事務局より、議事録の要録を WEB 及び中央図書館で紙ベースで公開することを報告
会長挨拶

・議題 平成 30 年度事業計画（案）について

事務局：(事業計画案を配布資料に基づき説明)

会長：何かご意見はないか。

委員：堺でも世界文化遺産の取組をしている。本の展示だけでなく講演会や歴史散歩などを実施している。イベントを考えてはどうか。ダルビッシュ有文庫に関連してスポーツと本の事業の取組はできないか。四天王寺大学との連携事業について、資料をどのように使えるのか等案内が要るのではないか。逆に学生が市立図書館を使えるのか。箕面では市立図書館の本を大学図書館で借りられる。学生ボランティアの取組みとはどういったものか。

事務局：百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録について、市全体として取り組んでいるが、図書館課では担当課の協力で職員研修を実施した。この知識をもとに展示の充実などに活かしたい。ダルビッシュ有文庫はスポーツ関係資料の充実と、それにより広くスポーツに親しんでいただけるよう事業を行う予定をしている。

事務局：四天王寺大学の学生は市内在学ということで市立図書館が利用できる。市民が大学図書館を利用するには、大学に登録などの手続きをしたうえで行くたびにゲートで入校手続きなどが必要で、市立図書館での利用はそれらの手間がなく利用できることになる。学生ボランティアは今年度に紙芝居グループの実演を実施した。来年度も考えたい。

委員：羽曳野は歴史遺産が充実している。河内長野は、観光名所と本の関連パンフを作って観光案内所に置いている。羽曳野でも図書館だけでなく、関連部局と一緒に頑張って積極的に進めては。ダルビッシュ有文庫などいろんな部署と手を組んで図書と関連させた取組を考えてはどうか。

事務局：担当課と連携を検討している。

委員：史遊会がパンフを配っている。図書館に置いてもらうというのはどうか。以前、教育委員会に寺や遺跡ごとのパンフがあった。復活してくれたらと思う。

委員：新聞で図書館と本屋との連携の記事があった。本を提供するのは同じ。図書館で本を借りてそ

の本を店で買うとポイントがつく、などだった。

前回、教育長から読書により深く考える人間づくりをしたいとの話があった。教育長に新しい取組があるのか聞いたかったが…。

委員：親が図書館に足を運ぶことが大切ではないか。

委員：小・中学校での貸出冊数を見ると、中学校になるとがたっと落ちている。司書の役割が大きいのかなと思う。中学生からこそ読書により深く考える人づくりは大事なことだ。

事務局：毎年開催している図書館を利用した調べる学習コンクールは、図書館を使うだけでなく自分で研究し自分で考える力を身につけることに役立っている。

委員：中学校の現状は、先生が激務で余裕がなく、司書から読書活動について言い出しにくい現状がある。図書館が開いていると子どもは来るが、学校を巻き込んで何かしようとするには先生の図書館や読書について深い理解が必要。だが、たとえば先生が“11ぴきのねこ”のキーホルダーが何かご存じない。いわむらかずおの“14ひき”シリーズも見ただけがない。…ということがあった。先生方の激務の邪魔にならないよう、読書の必要性を先生に伝えるところからの仕事という側面もある。

事務局：学校との連携は、連絡便により行っている。年々学校から図書館へのリクエストは増えている。小さい時期からの読書習慣が中学・高校へと引き継がれていくので学校・家庭での読書活動に努めていきたい。

委員：小学校に司書がいることは誇れるが、中高は忙しくなり、大学になってから読書経験がよみがあることがある。毎回言うことになるが、駒ヶ谷小学校に司書がいらないのは不公平感を感じる。頑張っている羽曳野市の取り組みに小さな抜け穴があるようでもったいない。

委員：中学校に“スイミー”等の絵本キャラクターをお面にして飾っている。それぞれが小さいころ読んでもらった思い出を持っている。子どもが懐かしさを持つことが大事。子どもの中に、中学生になって何か残っているのはうれしい。小さいときに与えていくものの大きさを感じる。

委員：大人になってまた、読書の大切さを子どもたちに伝えてもらえる。図書館が中心となって各部局と連携して広げていけたらいいなあと考える。教育長がわかってくれていることに感動している。

委員：学級単位で音読したことがある。短い時間でもそういうことも読書のきっかけになるかもしれない。

委員：小さいときの読書体験が高校・大学までプラスに働くことが大きい。

委員：保育所で働いていた。危惧するのは、若い父母がデジタル化になり本を読まない方が多い。小さいときから本を体験することはいいことだが、できていないのが現状。大人でも読んでもらうことの心地よさをわかってもらう、体験してもらう。実感すれば、子どもたちに伝えられる。若い父親・母親にそういう場が要るのではないか。母親教室などで絵本を読むことが心地いいとのプログラムを入れてほしい。

委員：文庫連絡会で企画を考えるが、保健センターとこちらの連携ができにくいところがある。他の部署との連携がうまくできると、市民に伝えたい思いが伝わる場が提供できるのではないか。中学生が図書館を懐かしい場所と感じている。先生が忙しいときほど、単に読書活動を継続できる、心の悩みにかなう本が提供できる、居場所のない子どもたちに居心地よい場所を提供できるというように二重にも三重にも中学校の司書配置には意味があるし、教育長の言われる深く考えることのできる子どもをということには、小学校で基礎ができさらにきちんと考えられるよう中学校に司書配置を切に願う。

委員：昔、保健センターに本を持って行っていたが、本を読んでもらう時間帯がとれないとのことだ

った。

事務局：4ヶ月検診時、案内の配布は続けている。

委員：書店との連携の話では、私のグループでは西浦の書店におはなし会に行っている。書店からの依頼による。子育てのお母さんはよく聴いてくれる。そういうところからも少しずつ読書が広がってくれるのではないかと考えている。

委員：書店との連携について、ツタヤがやっている図書館では不適切な選書がされていたり、ポイントがつくことで図書館で借りたことをツタヤに伝え、射幸心をあおることと個人の読書の秘密を守るという観点から注意する必要がある。

本は売れなくなっている。読む人を増やすことでは本屋と図書館は同じ。大手でない町の本屋がつぶれていく実情がある。地元の書店から買う、講演会で本屋が販売する場を提供する、など連携は可能と思う。

委員：町の本屋がつぶれないように願う。

委員：地元の本屋は大事にしたい。

子ども読書活動推進計画の第2次の期間が終わるが、次はどう考えるのか。国は第4次まで行っている。数値目標、達成率などこれでいいというわけではない。国では18歳まで対象になっている。中学生、YA層の今後の充実に向けて取組が必要と思う。

委員：子ども読書活動推進計画をこの協議会で検証するというのなら、協議会の開催は年度当初と年度末の2回でなく、話し合いができる場が必要ではないか。協議会で取りまとめて市にお願いする場があるか検討をお願いできないか。

事務局：持ち帰って検討する。

委員：急には無理でも。

委員：策定に関わっていないので、計画を熟読しないとわからない。年2回の協議会の中ではむずかしい。あと1回、検討する回は必要ではないか。

会長：検討願います。

・議題 第2次羽曳野市子ども読書活動推進計画の進捗状況について

事務局：子ども読書活動推進計画の数値目標について説明します。2017年度末（＝現在、年度途中）が目標となっており、中間報告として2016年度末の数値を出しています。

登録率の減少 貸出冊数制限を5冊から15冊にしたので、子どものカードを作ったの利用がなくなったと考えられる。長年利用のない登録を削除した。

0～18歳人口 2006年19%、2016年17%。2%の減少は大きい。

児童書貸出冊数 子どもの絶対数が減る中でどうして伸ばしていくかが課題。

関連行事参加者数 おはなし会、スタンプラリー等で目標達成できた。

1人当たりの貸出冊数 小学校：子どもが減る中で伸びている。年間64.3冊

中学校：指摘のとおり減っている。

図書館からの団体貸出冊数 小学校の利用増による増加。

他部署との連携 学校だけで手一杯の現状。

幼稚園・保育園 たけのこくんブックボックスの利用により増加。

子ども文庫 文庫数の減少により、貸出冊数の減少。

委員：子ども文庫への支援はありがたく感じている。